

「主体的な学び」の言葉がもたらす陥穽と音楽教育の意義 —疑似的に一般化された用語を哲学の視点から問い直す—

The Pitfall of the Japanese Term "Shutai-teki" and the Significance of Music Education: Questioning pseudo-generalized terms from a philosophical perspective

清 水 稔*
Minoru SHIMIZU*

要 旨

The purpose of this paper is to reexamine the Japanese term "Shutai-teki" in music education by referring to the theory of Bin Kimura and McTaggard and the U theory of C. Otto Scharmer, based on the history of philosophy. The Japanese term "Shutai" was created during the Meiji era while translating the word "subject" in philosophy. Bin Kimura states that "subject" is the principle of life in general on the time axis. McTaggard's conclusion is that time is not real, which leads our recognized time to be "created time" with invisible-subjectivity-conscious action and self *I* as its background. There from, it becomes clear that asking students to be "Syutai-teki" (used as Active learning) in the educational setting inhibits the original "proactivity" of the children. From this logical consequence, the significance of music education as a space for creative trial-and-error, utilizing the inherent subjective of the students was discovered.

キーワード : 主体性, 哲学, 時間論, 音楽教育

はじめに

平成29年(2017年)3月に告示された小・中学校学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」が「授業改善の指針」として掲げられている。そのため、多くの学校では、「主体的な学び」を校内研究の主題として掲げるとともに、教師は、児童生徒たちの評価の観点、あるいは授業評価の観点として「主体的」であることを取り上げている。しかし、その解釈は個々に委ねられており、指導者によって「主体的な学び」に対する捉え方は異なる。

中央教育審議会では、この学習指導要領改訂の審議にあたってアクティブ・ラーニングを掲げてきたが、2017年2月に公示された「小中学校学習指導要領改訂案」では、その用語が消えて代わりに「主体的・対話的な学び」となった。それは、アクティブ・ラーニングという用語が有している多義性が教育の場に持ち込

まれることへの懸念があっただが、「主体」「主体性」「主体的」という用語も同様に、分かっているようで、曖昧なまま用いられているのが実情である。

私たちは、日々、言葉を語り合い、読み書きする言語活動の中で生きている。それは時代と共に変化するディスクール(言説: discours)であり、個々の表現であるエノンセ(言表: énoncé)の総体として互いに「つくりつくれる」中で構築されるものである(フーコー1981, pp. 178-179)。その関係性の中で人々は、中山(2000)が、フーコーのディスクールは無意識のうちに制度や権力と不可分に結びついていると指摘するように、知らずにディスクールが持つ自律性に巻き込まれ、自らが構造を再生産しているときがある。そして、その連続的な意味の再生産の中で、各々の言葉が持つ意味が定立した歴史的・文化的な背景は、多くのエノンセとディスクールによって忘却の彼方へと押し込まれていく。その結果、人々が言葉を使用する中

*弘前大学教育学部音楽教育講座
Department of Music Education, Faculty of Education, Hirosaki University

で、新たに反復されたことが、言語ゲームとして社会のルールとなり、言葉の意味作用として取り込まれることによって、多義性を有する、あるいは当初とは異なる方に偏向して膠着した意味作用を得る、といったことが、その言葉の〈見せかけの一般性〉となっているのである。

これは何も「主体的」という語に限ったことではない。しかし、ここで問う「主体的な学習」など、教育の場で多用される言葉の意味については、曖昧にしたまま思考や議論を進めることが、誤った結果が生じさせることを強く意識する必要がある。なぜなら、教育は未来に直結するからである。中山(2000)は、ディスカールを権力の場と認識した上でつくりかえることを主張しているフーコーの考え方の必要性・有効性を主張する(pp. 298-299)。「主体的な学び」はディスカールの流動性・権力性を踏まえた上で、用語として一度問い直す必要がある。

そこで本論では、哲学史における用語の変遷を踏まえた上で、木村敏の自己論、マクタガードの時間論、C・オットー・シャーマーのU理論を参照しながら、音楽教育における「主体的」という語について「主体」から問い直す。本論は、言葉の再定義へとアプローチしていくが、意味を固定することが目的ではない。人々によって凝固された言葉の意味作用(もしくは、言葉の恣意性)に流動性を取り戻させるには、場の固有性に応じた意味の再構築が可能とならなければならない。そのためには、言葉を新たに意味づける、あるいは離れて〈気付く〉視点が必要である。本論は、今後の主体性や主体的な学びを考え、議論する上での、ひとつの視座として提示するのが目的である。

1. subject の訳語を巡る歴史の変遷

始めに「主体」という言葉について、歴史的な変遷を追うことにする。「主体」という語は、今では一般的に用いられているが、哲学における subject (英) / Subjekt (独) の訳語として、いくつかつくられた中から明治期に登場する。ただし、最初から「subject = 主体」と訳されたのではない。そこには、いくつかの試行錯誤的な変遷が在る。小林(2010)は、日本の近代思想史における「主体」という語の成立の歴史的な背景と変遷についてまとめている。それをもとに原語を受容した時に訳語として生まれたときの試行錯誤の概要を以下にまとめつつ、その問題点を考察する。

最初に subject をどのように訳すか考えたのは「哲

学」の訳語をつくった西周(にしあまね)である(小林2010, p. 42)。明治3年(1870年)に西の私塾育英舎で行った定期講義の口述記録『百学連環』の中に、subjective には此観、objective には彼観という訳語が見られる。西が、この訳語を用いた箇所は、「凡そ学問たる此二ツに相関係して之に外なることなし」(西周1960, pp.147-148)と述べているように、学問として subjective-objective の二つの見方が在ることの解説部分である。すなわち、小林が指摘するように「観」の字が訳語として用いられていることから、「対象の認識の仕方における相違」という認識論としての概念が、subject の訳語における始めであった。その後、西は自身の論文において「主観-客観」というペアに訳語を置き換え、また、「命題」の解説では subject を「主位」と訳し、人間の思惟における行為の主体か目的かを問題とする文脈においては subject-object を「主格」「客格」と訳しているように、西周の訳語も一定していないのだが、それは小林が指摘するように subject という語自体がもつ多義性に由来する(小林2010, p. 50)。

まずは、この「訳語」という点から考察する。周知の通り、西は膨大な学術用語の訳語を創出している。これまで用いていた言葉に変換でき得ない概念に出会ったときに生じるのが新しい訳語の創出である。その西の翻訳の過程において、上原(2015)が「哲学」の営為を見出しているように、異なる言語体系と概念に入り込む際に、現象に対する問いが反省的に生じる。それは、哲学的な思考を伴った試行錯誤に他ならない。

大抵、訳語を創出する際には、原語が、長い歴史の中でディスカールによる変化を経た後に出会うため、多義性を備えていることが多い。そのため、異なる文脈をもつ言語体系として新しいシニフィアンを創出するときに、一対一対応にはなり得ない難しさが在る。

そうすると、訳語の創出において、シニフィアンが分化していくが、かつ、原語が共通のシニフィアンであるため、シニフィアンとしては隣接関係に在る。それによって、シニフィアンが対応する事象が、それぞれ subject の外延として在るにもかかわらず、シニフィアンが分化したときに切り離されて思考されてしまうため、本来、問われるべきことが棚上げにされて結論づけられる危うさが在る。

すなわち、subject を巡るシニフィアンの戯れには、思惟における行為主体としての「主位」も、文法上の「主語」も、認識としての「主観」も、異なった現

象でありながら subject として何か共通する概念が出現する可能性を内包している。同様に、この後に出現する「主体」もその関係性の中に在るのだが、シニフィアンが分化してディスクールが独立して言説として〈見せかけの一般化〉がなされたときに、他のシニフィアンがもつ概念が弱体化されるが忘却されてしまう、ということである。

いずれにしても、訳語の創出には、そこに関わった人物、及び時代背景が関わってくるのであるが、subject は、その訳出の当初において認識論が基盤に在ったことが分かる。まずは、そのことを踏まえる必要が在るだろう。それは、小林が指摘するように、カント以降の19世紀ドイツ観念論を学んだ西が訳語を創出することに拠るのであるが、その後、同じくドイツ留学から帰国した東京帝国大学哲学科の教授、井上が関与した1912年の『英独仏和哲学字彙』においては、subject に対して「心、主観、題目、主辞（論）、被験者、臣民、文主」と意味が包括的に拡大していくのである。

それでは「主体」という訳語は、いつ登場するのだろうか。再び小林による「主体」に至る訳語の変遷を見てみる。subject の訳語としての「主体」という言葉の登場は、その時期のヨーロッパにおける哲学における概念の変化と、その日本の中での哲学における議論を背景とする。その一つとして、次の西田哲学における主観から主体への移行を小林は挙げる。西田の哲学において重要な概念となる「純粹経験」では、主客という表現がしばしば出てくるが、それは、主観－客観に基づいた表現である。しかし、「純粹経験」とあるように、主観－客観というシニフィアンだけでは、足りない部分が生じる。そのため、新たなシニフィアンとして「主体」を必要とする内側からの要因が西田の論理が展開する中で生じたのだと小林は指摘する。また、そのような時期に、西田が、マルクスの『フォイエールバッハ・テーゼ』『資本論』『経済学批判』の影響を受けたことも要因として小林は挙げる。具体的には、マルクスが「観念論」を批判する議論を展開することから「Subjektiv」の訳語として「主体的」という語の必然性が生じたということである。因みに小林の論に補足をするとすれば、この訳語の転換は漢字が持つ特性によって生じたとも言えるだろう。漢字は表意文字の側面を持つゆえに、漢字による訳語は、その文字自体が意味作用を生じる。そのため「観」では認識論とのかかわりが強く連想されるため、他のシニフィアンが必要となるのである。

そのような経緯によって、哲学における subject の訳語として「主体」という語が誕生するのだが、その後、思想的なディスクールを重ねる中で、種や民族、国家、国体といった「シニフィアンの連鎖」を構築していく。戦後、文学や社会学、あるいは知識人や学生の間で、「主体性」という用語が、流行語のように一般的な論争に用いられるようになっていくのである。

さて、これらの経緯から次のことが考察される。このような、訳語創出における背景や、歴史的な文脈は、現在においても言葉の意味作用に無関係とは言い難い。なぜならディスクールにおいて付与された意味作用は、その言語ゲームの連続性において反復的に残っている可能性が在り、また訳語の問題は、本来は隣接関係に在りながら、事象の外延として在るにもかかわらずシニフィアンによる事象の分節が、他の領域を多い隠している可能性が在るからである。それにもかかわらず、私たちが現在、「主体的な学びをつくる」といったことを語り出すとき、これらのことは忘却され、議論は棚上げにされている。

そのため、気づかないところで意図しないコンテクションを生じさせていながら、そこでは「主体」や「主体性」について「当然知っていること」という〈見せかけ一般性〉によって言語活動が為されている危うさがある。以降、この点について掘り下げながら、用語の意味を問い直していくことにする。

2. 主体における第三者性と権力性

小林が「戦後主体性論争はマルクス主義ないし歴史的唯物論をめぐっての論争であった」（p.186）と述べるように、翻訳としての「主体」の現われが、マルクスの影響という文脈を負っていたことは、現在においても「主体」という言葉にはイデオロギーが紐づいている可能性が在ると考えられる。

フーコーが「一望監視装置：パノプティコン panopticon」の分析から、創造的な他者のまなざしによって、自らが権力関係をつくりだす構造に、人間の主体性の現われを見出している（フーコー2020, p. 234）。〈他者のまなざし〉によって主体の在り方が問われる場へと人が送り込まれたとき、人は、他者との権力関係の中に嵌め込まれることになる。小林は、フランス構造主義におけるラカンやフーコーの「主体」把握は以下のように言語に内在する「他者性」を介したものであると述べる。

近代哲学が自明の出発点として依拠した主体の「自律／自立」が、自立どころか、じつは監視装置や父ないし言語的無意識という「他者」を介して造られたものにほかならず、詩人ランボオの言葉をかりて誇張した言い方をしておけば、「私とは他者である」というパラドックスをまぬがれることのできない存在であることの宣言だったからである。(小林2010, p. 221)

構造主義を経た現代において、そのような中で立ち現れることが明らかにされた「主体」であるが、それにもかかわらず、先天的に自律的存在である自己を、いかに構築するか、といった他者と切り離された形での〈固有な存在〉が強調される形で、いまは「主体的あること良い」ということが先行して機能しているように見える。

「主体」や「主体性」を明確な対象として意識するには、他者とは異なる存在として、その差異化の生成から他者を強く否定することが必要となる。しかし、鏡像関係として主体が他者に投影する形で成立している以上、行き着くところは他者の否定は自己の否定に他ならない事実と対峙する瞬間が訪れる。小林は、真摯に主体性を追求することによる自己否定の危うさを、いくつかの例によって示している。「主体性」は、自己の存在とかかわる語である以上、他者が用いるには慎重な姿勢が求められる語であると言える。

日常の中でも「主体性」という言葉は、頻繁にではなくとも肯定的な価値をもって語られる。「主体性」と同一視されているであろう〈私〉についても、その主張を通して「〈私〉が何者か」を明確に表わすことが是とされている風潮が在る。それは、ひとつ間違えると他者との断絶へとつながる側面も在るにも関わらず、である。

そもそも「主体的に…」という言葉は日常、とくに家庭生活や個人的なことで用いることはあまりなく、常に「第三者」としての〈まなざし〉を含んでいる。具体的には、第三者として客観的に、対象の行為を同定するものとして用いられている、ということである。「今日は主体的に買い物をした」と言うことはないだろうし、まして、〈私〉のことを、「主体は…」と置き換えることもない。自己反省的に「主体的に取り組めただろうか」といった思考が出てくるのは主に仕事など、社会的なかかわりの中で、他者から求められる「評価のまなざし」を想像する形で現れる。そのような社会的で他者性という「場」の固有性をもった

「主体的」という言葉は、特に教育においては頻繁に出てくる。そこでは、「主体」という言葉が、自分と同一に捉えられ、「主体性」を身に付けることが“良いこと”だ」という肯定的な捉え方が前提的に為されている。小林は、現代の「主体」について次のように述べている。

それが日常生活のなかに市民権を得て、普通の言葉として定着するにしたがって、逆に哲学ないし思想を語る用語としてはその影を薄くしてきたようにも見える。(小林2010, p. 218)

このように『主体』とか『主体性』という言葉が思想の概念としてことさらに主題化されなくなった(前掲書, p. 218)とし、それを「主体の希薄化」と名付けるが、それは決して消えた訳ではなく、「アイデンティティ」や「自分探し」という言葉にすり替わったのだと指摘する。その意味は、次のように解釈できる。

シニフィアンが変わっても、それは〈見せかけ〉で、意味作用の構造そのものは、同じ subject を巡って生じている言語ゲームの連続性の上に過ぎない。それゆえに、学生運動の頃のような流行り言葉のように「主体性」という語が現れずとも、構造的な意味作用を他の語にすり替えて、「自分らしく生きたい」という欲望を生じさせる、あるいは、自己反省的に「自分らしさ」の有無を〈私〉自身に問いかける、または、「〇〇は、自分が無いよね」といった集団からの評価が、評価の命題自体を問わずに語られたりしている現状がある。それは、姿は変わっても、「自分探し」が良いことだ、そうでなければならぬ、といった価値観が一般性を伴って、議論を待たずに前提的にエノンセもディスクールも開始されるのである。そして、そのような〈兄弟的な〉ディスクールを背景としながら、教育の場では「主体的」という言葉を日常的に用いる中で、「〈自分探し〉に寄与する」という意味作用を暗に伴いながら議論がされていく。

このように歴史的な変遷を俯瞰すると、訳語として生じる意味作用の齟齬という問題も含めて、哲学の用語としての歴史的な文脈と、そこから派生している構造的な意味作用の背景が「主体」という語に在ることが再認識される。先に述べたように、「主体」という語は、第三者からの視点となって、主客の関係性における位置関係の同定として用いられる。このとき「主体」は相対的、客観的に対象化されたモノとして認識

されている。すなわち、〈自分探し〉のように言葉を変えることなく「主体的に」という言葉が教育の場で、日常の言葉として一般的に用いられるのは、「教師」の側から「生徒」を評価対象として見る関係性が在るからだと推察される。

そのような権力構造から離れて、人々が互いにより善いディスクールに作り変えていくための語の捉え直しを目的として、ここまで訳語の変遷をもとに考察をしてきた。そこで次は、原語である subject の哲学における歴史的な意味の変遷をもとに考察をする。

3. 西洋における subject の主客反転

木村元は、『哲学・思想事典』（岩波書店）の「主観」の項における「西洋哲学史における〈主観〉の変遷」の中で、カントの頃にそれまでの意味の逆転があったと解説する。具体的には以下の通りである。

歴史的には、デカルト、スピノザらによる演繹的に真理を探究する「大陸合理論」とベーコン、ロックらによる帰納的に真理を得ようとする「経験論」の対立的な構図を経て、中世から近代初頭までは、客観的存在者を意味していたのがラテン語の *subjectum* で、主観的な表象を意味していたのが *objectum* である。それが、デカルトによって懐疑論的に対象が疑われ、思考する“私”の方に現象や観念の基盤が在るとして、人間の認識によって決まるとしたカントによって、主客の意味の逆転が生じることとなった。その後、フッサールの現象学と、それ以降の哲学によって客観が主体性における主観によって成立するようになると、再び、その意味は曖昧になっていく。

このような歴史的な変遷におけるシニフィアン—シニフィエの不安定は、むしろ主客の関係性における本質的な部分を表していると言える。すなわち、本来的に客観と主観、あるいは客体と主体が、独立的に分けられるものではない、ということである。具体的には、対立的な位置関係でありながら共に働くことで成立している相互関係こそが主観と客観だからある。その関係性が変わることなく存在するのだが、それをどちらに軸において、どのように名付けるか、という問題であって、言葉の恣意性へと帰着する。すなわち主客の不安定さは、それらが共時的に立脚する中で、意識の志向性によって反転可能性を有していることの現れ、ということである。

この反転可能性は、ラカンと木村敏が示す自己と他者、もしくは意識と対象との関係性から理解される。

鏡に映した自分を見て〈私〉の姿が認識できるように、私たちは他者との出会いにおいて、〈他者のまなざし〉になることで想像的に自分の姿を得ている。そのように対象、あるいは他者と私は認識の関係において表裏一体の関係に在る。この鏡像的な関係性において自己が創出することを示したのがラカン（1972）の鏡像段階論である。

つまり、「私は…」というのは、独立して生じているのではなく、いつも意識する対象がいることによって生じている共時的な鏡像関係であり、主客はいつでも反転可能性の内に在る、ということである。また時間軸上においては、意識と対象の関係において、主客が分離する以前の状態から言語との関係性において認識へと至る過程において、その都度、立ち現れるモノである。木村は、その共時的な鏡像関係による〈私〉の現われを、主語的自己と自己の述語作用の関係として、以下のように捉える。

私の同一性が成立しうするためには、そのつどの述語作用がつねに同一の目標に向っての反復的な復帰でなくてはならない。述語作用は、自らの反復的な遂行の軌跡として自分の手で樹立した主語的同一性の側から明確な方向を与えられない限り、主語的同一性を継続するような仕方では私を産出することができない。つまり主語的自己と自己の述語作用とは、互いに一方が他方の成立の根拠となっているような関係のうちにある。（木村1872, p. 84）

木村が述べるように、「私は…」として現れる主語的自己は、述語作用の目標となることで、「…は私だ」という述語作用を生み出し、その「私」が生まれることで、方向性を示す「私は…」が可能となる。subject（主語）の「私は…」は、「…は私だ」という述語の側から見れば、目標として objective であって、そのとき subjective になっている「…は私だ」は、それを産出した「私」からすれば、やはり objective である。このように、お互いがお互いの理由として関係している以上、主客は、いつでも反転可能性を互いに有している。すなわち、主観と客観、自律と他律は、ともに同一のことを成立させている視座の違いであって、第三者、あるいは主体自身の〈第三者のまなざし〉による自覚的な言葉による同定の違いということが言える。

この意識作用と対象の関係において生じる〈私〉は、「環境」との出会いから生じ続けるのだが、その

「環境」における「他者」がもつ過去の因果関係は、それぞれの連続性が相互に関わることから、その通時的な因果の連続性は、自らの生命を越えて、あらゆる生命の起源まで、つながっていくことになる。木村は、生理学者のヴァイツゼッガーの論をもとに、「主体性」について、人間を環境の中での有機物、すなわち「生命」とした上で捉えることの必要性を主張する。

生きているものの観察にたずさわる研究者が、この生きているものと共通の「生命一般の根拠」への関わりを共有しなければならず、しかもこの「根拠への関わり」こそが「主体性」のことなのだという洞察は、いくら強調しても足りないぐらいの重要性を持っている。(木村2005, p. 17)

ヴァイツゼッガーの論理では、主体は確実な所有物ではなく、それを所有するために、環境との出会いの中で絶えず獲得し続けなくてはならないものだとされる(ヴァイツゼッガー1995, p. 277)。木村は、その「生命一般の根拠」への関わりの中で、環境との「出会いの様相が変わるごとに」主体を維持しようと、「新たな出会いを樹立」する原理が「主体」である、とヴァイツゼッガーの論理を引用しつつ定義する(木村2005, p. 26)。

そうすると、自己や〈私〉といったものは、絶えず変化する環境との出会いの中で、連続的な「まとまり」を形成する「原理」として、その仕組みの中に登場してくるに過ぎない。自己や〈私〉の中に主体性が生まれるのでも、そこに有無が論じられるのではなく、認識されることのない生命一般としての「主体性」を内包しながら、その「生命一般の根拠」である「主体性」の上に立ち上がってくる、絶えず創造されるものであると言える。すなわち、主体は、アプリアリに何か〈ほんとう〉の自己や〈私〉が存在し、「自分探し」の言葉のように、「私は…」として語る対象として、他者も含めたディスクリールの中で「私が何者か」を〈探す〉ような対象ではない、ということになる。

誤解がないように付け加えるならば、自ずと「そうではない」という対目的に否定が生じて未来の〈私〉を希求することは、絶えず創造される〈私〉にとって自然な姿で、ここで言う〈探す〉対象ではない、の本意は、シニフィアンとして他者性を強く帯びた中で、「私は…」という人間です」という明確な自己像を他者

に開示しないとイケないような〈私〉を探す不自然さへの指摘である。ゆえに、「場」も変われば〈私〉の現われも変わる。そこに他者が評価的に「〇〇は主体性がない」と言うように〈私〉と「主体」を同一視して、一般的価値のように語られるのは、〈場〉において創造された〈私〉への権力的な否定につながる危うさが在るということである。

このように、第三者の権力性を帯びた「主体」によって語られる「主体的な姿」に惑わされずに、個々の異なる〈私〉の現れの奥に「生命が求めること」として主体性が内包されている、と捉えることで学びの場への捉え方は変わってくるはずである。そのためには、「主体」が、環境との出会いの中で、自らを維持しようとして〈私〉が形成されていく「原理」であることを踏まえた上で、時間軸上での認識と行為の関係という「環境との出会いの構造」として捉えることが求められる。そこで次に、時間論の視点から主体性を中心とした議論を展開する。

4. 時間論的視座による主体性の俯瞰

音楽行為は、時間において成立する以上、時間における認識と自己の成立を議論することが重要である。後にそのことについて触れることを踏まえつつ、主体性を問い直すべく時間について以下に考察する。

サルトルは、小説『嘔吐』の中で、〈われわれ〉の時間の底に展開する時間と、〈われわれの時間〉とは別の時間の二つの時間軸が在ると言う(サルトル1951, p.37)。ここでサルトルが述べている〈われわれ〉は〈ヒト〉として、すなわち言語を持つ生命としての一般的関係性を表すために用いた解釈できる。この二つの時間のうち前者は、主体の意識空間に展開する時間であり、後者は、意識対象(他者)の時間として捉えることができる。それは、ノエシスとノエマの関係でもあり、対象の持続と変化の中に時間を認識するから、連関して主体の時間が認識される関係性である。

この関係性について筆者は、先行する論文で議論しているため、ここでは省略するが、木村が、自己と時間の関係性を論じるあたって、ベルクソンの純粹持続だけでは時間は成立せず、空間的な「ものとの存在論的差異を構成しながら現れ出るときにのみ、そこから時間ということが成立してくる」(木村1982, p. 42)と述べるように、時間は、ものという空間的な領域を抜きにして成立しない。時間は空間と、二分化できることではなく、お互いを必要条件としている以上、〈わ

れわれ)が「時間」と名付ける事象は、単一の対象としては留めることのできない現象である。そのような意識と対象、コトとモノ、純粹持続と空間といった異なりつつ片方のみでは成立しない共生関係ゆえに、独立した事象として扱おうとすると矛盾が生じるのだろう。それゆえ、時間を存在論から批判したマクタガードの時間論は、結果的に論理を真とできずに「時間は実在しない」という結論に行きついたのでとも取れる。むしろ論理的な矛盾が生じるところに存在の真が在ると言える。

現象学の視点による認識論にもとづいて、時間を〈実感される前のコト〉〈実感されるコト〉に基づいた〈認識されるモノ〉として捉えたときに、未来も過去も存在せず、ともに同一である。純粹持続に基づいた存在認識において区別すべきは、未来、過去ではなく、「未然のコト」か、「既成のコト」かの違いである。コトは、両者に振り分けられ、いつでもモノとして現前する可能性として在る。

マクタガードは、論文「The Unreality of Time」(1908)において、時間は実在しないと論じる。その論証において、過去から現在、そして未来へと連なる位置を示す時間の系列をA系列、ある地点より前、ある地点より後という形で表現される時間をB系列とした上で、そのどちらも反駁が在ることを示す。A系列は、ある出来事において過去は未来でもあり、現在でもあり、互いに排除し合うため矛盾すると言う。すなわち、ある事実における特性に過ぎなくなるが、事実が変化することは実在としての普遍性が無くなる。またB系列は、「～より先」「～より後」という関係は変化しないため普遍性が在るが、時間は変化をするという前提が成立しない。そのため、それだけでは説明が不足すると言う。それらの議論を踏まえた上で、純粹に順番であるとした数列的なC系列を措定してみても、順番は在っても向きを決定する系列とは成り得ず、変化が無いため、やはり、変化するという前提が成立しなくなる。それらの矛盾から「全体としての時間も、A系列やB系列も、実在しない」(マクタガード2017, p. 54)と結論づけ、我々が知覚しているの時間は、「見せかけ」であると主張する。

マクタガードの論証を、ここではあまりにも簡略化しているが、本論で取り上げたのは、「実在しない」という我々の実感からすれば、受け入れがたい論証が、マクタガード自身「誤謬だけでなく真理も含まれている」(前掲書, p. 55)と述べるように、そこに「われわれは諸実在の間の真の関係の一端を捉える」(前

掲書, p. 55)のである。

すなわち、マクタガードの非実在性の論証が示すのは、時間は認識における実在としての対象ではないということである。論理展開において、B系列、C系列がともに異なる時点を固定してしまうために、変化自体を体現しないためにA系列が時間の真の系列のように見なされるが、それが矛盾を内包するために実在しない、というのがマクタガードの論理であった。それは「時間は変化する」という前提に立っての論証であるが、どの系列においても順番と向きが前提として在る上で証明が成立しないという矛盾を指摘する。すなわち、B系列、C系列はA系列を必要とし、A系列を説明するにもA系列が必要となる矛盾が生じるということであるが、永井はマクタガードへの見解において、「時間の存在のためには、その矛盾が不可欠である」と指摘する(永井2017, p. 250)。そして、その理由として、「われわれが生きる世界」が主客の異なる世界観を併用していることを挙げている。

すなわち、時間を言語表現の系列における矛盾から、その実在を立証することが出来ないという帰結は、時間が意識の対象ではなく条件のようなものであることの証明に他ならない。「A系列を説明するためにA系列が前提されねばならない」(マクタガード2017, p. 43)という矛盾の指摘は、時間を成立させているための条件を捉えようとしていることの現れである。その条件とは、ベルクソンの純粹持続にやはり立ち戻るのであるが、同じ今が無い以上、差異が連続的に停止することなく生じているという性質、その〈絶対的な差異〉の中で「時間」も含めて現象が成立しているのである。そして、その現象に「主体」の原理が、すなわち〈私〉の創出も含めた或る「仕組み」による創造が関わっているという捉えが「時間」との向き合い方として、我々には必要であり、そのことは、時間について語るときは、主体の認識が関わる「言葉」の汚染が含まれることを自覚していることが必要であることを示している。時間の認識が、そのように主体を通過しなければならないとすると、過去、現在、未来は「言葉」の問題として捉えることができる。

そこには意味作用としての差異があるのであって、意識対象としては、すべてモノであって、時間そのものではないことになる。すなわち時間が〈存在するモノ〉として「現前」した時点で、それは創造された時間であって、ベルクソンの言葉を借りれば「ほんとうの時間ではない」とも言える。しかし、人である〈わ

れわれ)からすれば、創造された時間でしか、時間に出会えないため、それこそが「生きた時間」だとも言える。事実、自らの時間をうまく創造できなくなったときに精神病が発症することを木村(1982)は時間と自己の関係において指摘する。

未来として、過去として考えることも、映像としての表象や音声イメージとして、対象のモノとして現前している以上、遡及的な想起による反復によって成立しているのであって、すべて、純粹持続からすれば、事実として現在を通過したモノであり、既成のコトである。

すなわち次のように言える。過去の物事は、常に現在において想起できる対象として意味を与えることが可能であることから現在であり、また、その意味作用が未来に作用することから、未来のコトでもあり、また、未来においてどのように意味が変化するかも未然であることから、未来の「可能性」を有しているとも言える。その意味からすると、「過去の物事は未来でもある」とも言える。実際に歴史的な事象でも意味が変わることもあれば、事実さえ反転する可能性も有している。事実としては選択された一であって、常に消え去るという現在においては、「…で在った」という性質を帯びたことでありながら、〈そのときのコト〉としては絶対的な差異と不可逆においては、〈今、ここ〉からは消え去り、「無い」のであって、主体の意味作用、言語化の対象として、現在にかかわり現在を生成するための「想起」としては、瞬間においては、再生的、創造的な過去の想起が、ほぼ唯一的、限定的であったことが、時間が離れるほどに〈これからのコト〉として新たな可能性を帯びるのである。

すなわち絶えず、推移する(ように感じられる)〈今〉において、〈今〉を通過する前か、後かという連続性における差異が「時間」の現れの差異となる。現在を通過することで(現象の契機としての)“コト”に付与される“「事実性」の並び”は「～より先」「～より後」という意味作用において定立して変わることがない。

認識される時間が〈私〉とともに、主体を通過して創造されるモノである以上、また、そのモノが主体のコトをつくる以上、“自らつくる時間に自らがつくられる”ことになる。同時に主体が他者と環境、「生命一般の根拠」と関わることから、他者の創造する時間ともまた関わるという、複合的な関わりの中に在る。そのような捉えられないコトが、空間に浮遊する中で、絶対的な差異の場として〈今〉が開いているとこ

ろに〈私〉が立ち続けているのが「現在」と名付けられる「場」だと言える。

つまり、時間の底に在る数限りないコトは、意識を超越したところで絶えず生成されつつ、その果てしない空間から意識主体によって掴み取られるのであって、〈未然のコト〉も〈既成のコト〉も、共時的にかかわって〈今、ここ〉が現出している、と考えるべきである。未来や、過去、現在といった主体による認識は、各々の意識主体が、「言葉」にしたときに定立するのであって、「未来」「過去」「現在」が先に存在しているのではない。在るのは、その契機としての〈未然のコト〉と〈既成のコト〉といった差異の中の差異、さらに、純粹持続において付与された順番性である。これらは、主体にとって意味作用を生み出すコトでありつつ、限定的に作用する。

そのような条件において〈今、ここ〉という現在が現れ続けるとき、主体は、どのように自らつくり出す「時間」、すなわち「未来のこと…」と「過去のこと…」と関わりながら、「今のこと…」として〈今〉を意味づけるのであろうか。

内的な「言葉」も図像としての「表象」も、あるいはそれらに基づく自己イメージも、意識に現れるモノとしての現前は、絶対差異における反復によって成立する以上、常に「現在」を通過したコトの遡及を含む。主体の〈今〉において、未来も過去もなく、〈未然のコト〉と〈既成のコト〉が共時的にかかわっている中で「いまの〈私〉」が主体(主体性を含む“まとめ”の原理)によって生成されるとき、どのコトに意識を向けるかが「可能性」の認識と行為の「選択」に関わってくる。現前した「こと」(モノ化された「…のこと」というコト)から「行為選択の可能性」が生じるとき、意識の志向性、自由意志としての作用を仮定すると、どのような〈まなざし〉(=主体固有の意識作用の志向性)を持つかが、その「可能性」に対して決定的な要因となる。

そうすると、「時間軸」において絶えず生じている「主体性」を内包しながら、絶えず生じている〈私〉、あるいは〈私〉として現れなくても反省的に捉えられるような主体としての現れ方に、その場における、その〈ヒト〉の主体性が在って、コトがモノとなることで、そのモノに連鎖する様々なコトに汚染されていく前に、あるいは、覆われて隠れてしまう前に、〈そのコト〉について気付き、意識を向けることで、その先に現れる「今のこと…」を変えるコトになる。

そのことは、〈私〉や〈ヒト〉、あるいは環境にとつ

て、より善いモノ・コトを創造する「可能性」との出会いを意味する。その構造は、おそらく、〈私〉が内包する「生命一般の根拠」とも言える主体性に主体が向き合うことに、近いのではないかと考えられる。その“可能性としてのコト”に意識を向けた上での〈私〉と、向けることなく生じた〈私〉では、思い描く「未来のこと…」も「過去のこと…」も異なるはずである。すなわちより善い未来を創造する可能性の拡大として、そのための現前、すなわちモノ・コトとの「出会い」をつくる「試行錯誤」のわざを身に付けることが〈ヒト〉には必要である。

それは、「主体的とは、こうでなければいけない」といった他律性が強く「選択」において作用するのではなく、自己の選択が保証された空間が必要である。このことは、“自ら進んで取り組んでいるように他者から見える”といった〈見せかけの主体性〉のことでなく、他者に委ねることも含めて主体の意志が自由である、ということである。なぜなら、音楽活動においては、誰かに促されて行った結果として、鳴った音に出会って初めて気付くことが在る。そのような他者との関わりも含めて、試行錯誤の場における意志が保証されている必要が在る。

すなわち、音楽行為をより創造的な場とするにあたって、一つの視座として次のことが言える。音以外の空間的なモノ、とくに「言葉」の意味作用から生じることから距離を取り、音を鳴らす中で、音の差異から生じた持続的なことを感情として自らの選択に関与できる場が、音楽行為における主体的な活動の場と言えるだろう。すなわち、「生命一般の根拠」と関わる中で、「～でありたい」という〈未然のコト〉から現れる言語化される前、言わば予感的なコトを活かす場の設定と、そのような意識を育成することが求められると言える。

すなわち、そのとき「～でなければならない」といった形で現れるような場、例えば「“主体的”でなければならない」といった自己反省的に〈既成のコト〉を志向する場は、主体が、その主体性として欲しているモノ・コトと出会える〈私〉の創造を阻害する可能性が在ると言える。

4. 音楽教育における主体性について

ここまでの論をまとめつつ、音楽教育の場について考えることで議論を一度閉じることにする。扱う主題が大きいために、ここでの議論は、今後の視座の一つ

に過ぎない。しかし教育においては重要な議論の視座だと考える。

ここまでの議論をまとめると、本来は哲学の訳語であった「主体」が、現在では、一般的に用いられる語となり、哲学的な問いや議論が棚上げにされている現状があるということであった。そこでは、人々に「主体性」は、「自分」と同一視されている状況があるが、哲学の視点、取り分け木村敏の存在論的視点からすれば、主体は、環境との出会いにおける「まりまり」の原理であって、主体性は、「生命一般の根拠」として不可視にかかわり続けることとして捉えられる。その原理に基づいた意識の働きがあつて、意識の対象として〈私〉と名付けられる自己が現れるとしたとき、西洋哲学における subject の主観と客観の反転があるように、自己は、絶対的差異の意識の持続（同じ〈いま〉は無い）において、主観と客観の両方で成立している。

その働きの中で〈私〉という自己が生まれるとき、subject（主語）の位置に他者（other/Other）ではなく〈私〉（I）が来ることで自律的な意識となるが、実際は、言語として〈私〉が意識されているときは、〈他者のまなざし〉になって対象化された〈私〉で、他律性の強い状況である。

その言語的な〈私〉が subject に現れる前に subjective（主語的）に機能する前言語的なコトが在り、「主体的であること」が〈第三者のまなざし〉で求められたときに、言語的な〈私〉が反省的に志向されてしまう。その状況は、前言語的なコトに現れる〈未来の可能性〉を疎外することになる、というのが本論の帰結である。

その論証として、本論では、時間論からのアプローチを試みた。木村敏は、ベルクソンの純粹持続だけでは、我々の生きた時間は成立しないとす。そこには空間としての時間が必要なのだが、空間化された時間は、意識空間において対象化される働き、すなわち主体の原理を通過する過程が伴っていることから、私たちは〈時間〉を創造している、ということが存在論から導かれる。それは、創造されたモノである以上、マクタグードの時間は存在しない、という結論と同根である。

具体的には、時間は、現前するモノの変化において「時間」として現れるために仮定的に定立される条件であつて、現在という一点で考えると、絶えず推移する絶対的差異である。しかし、差異は、それ自体では認識はされ得ず、空間的な反復を必要とする。それゆ

えに、意識空間における想起的な反復が必要となる。

空間は捉えられないコトに溢れており、意識によって捉えられ〈今〉を通過したコトは、事実性を帯びたコトとなり、〈既成のコト〉となる。一方、通過しないコトは、〈未然のコト〉として空間に浮遊していると想像される。そして、意識作用がいつでも、どのコトにも働きかけることができるので、これらは直線上にはない、と考えられる。なぜなら主体が、その意識作用の原理から対象化するにあたって、〈既成のコト〉も〈未然のコト〉も、事実の連続性を越えて表象化、言語化できるからである。

そのように主体性と自己を背景とした〈つくられた時間〉は、コトがモノ化する過程を経るため、絶対的差異が推移する〈今〉において、意識によって想起され続けなければならない。そのとき予期された〈未然のコト〉も表象化・言語化されたコトは、現在を通過した事実性を含む以上、想起された〈既成のコト〉が付加される。そのコトの同時性が「未来のこと…」でもありながら思考自体は「過去のこと…」という系列としての矛盾を生み出す要因となるのである。

そのようなコトの同時性における共時的な働きの中で、「主体」の意識作用が〈創造された時間〉の決定権を持つとき、他者によって「主体的に…」と求められることは、〈私〉が言語的に目的化され、かつ〈第三者のまなざし〉を文脈として持つため、「主体」を、意識的に対象化し、反省的思考へと向かわせる。そのことは、他者の望む姿への制度化であり、その他者は、既存の社会・文化構造の反復、再生産へとつながる。そのこと自体は、一方では社会が望む声でもあるが、「環境」の変化に触発された「～したい」という未来を志向しているコトとの出会いを、主体の意識が志向できない可能性がある。

そうすると、教育の場で「主体的に…」ということが一般的に用いられ、無批判に肯定的に捉えて目的化されているが、それが、児童生徒の成績として記号化され、自己評価の指標へとようになっていくことは、逆の事態を起こしていると言える。

「教育」は、もともと権力的である。日常のディスカールでも、「〇〇を教育する」と言うとき、そこには、ある種の暴力性が潜んでいる。あるいは、「これは教育だから」という言葉を持ち出すことで、何か正当性を主張できるような権力関係が、「教育」の言葉には了解的に含まれている。

本論で議論したことは、主体性の再定義へのアプローチとして、今後の示唆を得る視座に留めるが、

オットー・シャーマーのU理論が、本論の帰結に近似していることを最後に取り上げて、論を閉じることにする。

近年、ビジネスの経営者やクリエイターに影響を与えているC・オットー・シャーマー(2017)の「U理論」は、「過去や偏見に囚われず、本当に必要な『変化』を生み出す技術」と書籍のタイトルで謳っているように、個人や組織、社会における変革のプロセスを探求したものである。ここでは哲学や多くのインタビューを参照・分析しながら、従来の経験学習では足り得ないとして、プレゼンシングの重要性を主張する。プレゼンシングとは、sensing(感じ取る)とpresence(存在)の混成語で「我々は自分次第で現実になり得る未来の可能性からものを見るようになる」(シャーマー,2017,p.259)と定義される状態への動きのことである。そして、「機械的・直線的なプロセスではない」とした上で、「『つねに』環境と、自分の中から湧き上がってくるものに合わせて踊る」(前掲書,p.121)ような動きだと述べるように、現在(presence)において未来を志向するコトに意識を向ける人々に、その成功例があるとして紹介する。シャーマーは、プレゼンシングについて次のように述べる。

プレゼンシングは出現する未来の源^{ソース}からものを見始めると起こる。過去の存在^{プレゼンス}(現在の領域)、未来の存在^{プレゼンス}(出現する未来の領域)、^{オーセンティック・セルフ}真正の自己の存在^{プレゼンス}、この三種類の存在の間の境界が崩壊するのだ。(シャーマー2017,p.261)

シャーマーは、現在の自分の中に、〈そこ〉から生じ来るコトの重要性を述べた上で、自己の意識を変革することを求める。改革や変革をもたらすには、^{アーティスト}「芸術家」の視点が必要だと言う(前掲書,p.96)。そして、普通の見方では見ることでできない「盲点」に気付くことが大事であり、それは様々な姿で現れる、とする(前掲書,pp.96-97,pp.348-349)。

その気付きからプレゼンシングへと移行するのだが、シャーマーは「システムの囚人」から「内側から出現する新しい世界を誕生させる」への移行である「自己の反転」の例として、ヨーゼフ・ボイスの「7000本のオークの木」(1982-1987)を挙げる。それは、7000個の石が5年かけて7000本のオークの木へと変化していく作品であるが、その時間の変化を人々は感じ、その後も変化していくことを人々は感じ、考えることだろう。そこには、鑑賞者による「時間の創

造」が在る。人々は過去を感じながらも、その変容が続く先として「未来のコト」をその時々出現から感じ、思い描くことになる。そのとき、私たちは「現在」に生きながら「未来」を生きている〈私〉に出会うことになるが、その出会いが何をもちたらずかは、鑑賞者に委ねられることだろう。

他者も含めて、様々な環境との出会いの中で、自らが自らを創造している中で、主体性は絶えず自己の底流として持続している。その不可視の主体性が、様々な現れ方をすることで、現れてはじめて気づくようなコトがあるところに、児童生徒にとっての本来の主体性に基づいた〈私〉の発見が在ると言える。

ここから、音楽教育における主体的な学びについての、示唆を得ることができる。すなわち、前言語的な試行錯誤を創造活動において学ぶことができる場として、音楽教育の場は機能することができる。それは、音楽科の独自の意義として、創造力を養い、そのための技能を身に付けていくことのできる場である。そのときに、教師の側から「主体的かどうか」といった評価を児童生徒が求められたときに、児童生徒は、未来の可能性に蓋をして、過去を志向した自己反省することになる。それは〈つくって気付く〉というポイエシス的な学びを阻害する。古代ギリシャでは、創造の意であるポイエシスというシニフィアンを巡って哲学の議論がされたのは、それが生きることに関わるからである。西田幾多郎は、世界はポイエシスであるべきだと説き、そのためには「自己が如何なる立場にあるかの自覚からでなければならない」（西田1989, p. 84）と述べる。私たちは、創造行為から〈これから〉を自ら知っていく必要が在る。

他者から押し付けられた主体性からの脱却こそ、創造という「不確定な未来」を考える力、「語ること」のできる力として、音楽の場には相応しい学びなので

はないだろうか。そのためには、前言語的な直観において試行錯誤できるポイエシスの場として、教師は音楽教育の場を捉えていく必要があるだろう。われわれは「主体性」を問い直すとともに、音楽の場の在り方について問い直す必要が在る。

【引用・参考文献】

- 石井雅巳（2018）「翻訳と日本語—西周の言語哲学—」『北東アジア研究』第29号、島根県立大学北東アジア地域研究センター、pp. 169-181.
- ヴァイツゼッカー（1975）『ゲシュタルトクライス』木村敏・濱中淑彦共訳、みすず書房。
- 上原麻由子（2015）「西周の哲学—翻訳的探究を経て新たな知の創造へ」『思想間の対話』藤田正勝編、法政大学出版社、pp. 153-172.
- 木田元（1998）「主観」『哲学・思想事典』廣松渉他編、岩波書店。
- 木村敏（1982）『時間と自己』新潮社。
- 木村敏（2005）『あいだ』筑摩書房。
- 小林敏明（2010）『〈主体〉のゆくえ—日本近代思想史への一視角』講談社。
- サルトル、ジャン＝ポール（1951）『嘔吐』白井浩司訳、人文書院。
- シャーマー、C・オットー（2017）『U理論』[第二版] 中土井僚他訳、英治出版。
- 中山元（2000）『思考の用語辞典』筑摩書房。
- 西周（1960）『西周全集4』大久保利通編、宗高書房。
- 西田幾多郎（1989）「絶対矛盾的自己同一」『西田幾多郎哲学論集Ⅲ』上田閑照編、岩波書店。
- フーコー、ミシェル（1981）『知の考古学』河出書房新社。
- フーコー、ミシェル（2020）『監獄の誕生—監視と処罰』田村俣訳、新潮社。
- マクタガート、ジョン・エリス（2017）『時間の非実在性』永井均訳・注解と論評、講談社。
- ラカン、ジャック（1972）『エクリ I』宮本忠雄他訳、弘文堂。

(2022. 9. 2 受理)